
遠回り

あくあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遠回り

【Nコード】
N5707B

【作者名】
あくあ

【あらすじ】
高校入って何度振られたか…でも、その恋心は…本当なんかじゃなかった…

「はぁ…」

気分最悪。暗い表情で教室へ向かっていた。
気付くとすぐ後ろから声が聞こえた。

「よっ美菜!! 朝っぱらからしけてんなぁ」
バシバシッ

テンションの高い井上はいつも肩を叩きながら声をかけてくる。

「いたっ…朝っぱらからうっさいよ井上。」

「何した!? もしかして振られたとか!？」

「……………」

「凶星!? …どんまい!! きにすんなって!

私はすごい形相で井上を睨んだ。

「んなことできるわけないでしょお!!??」

井上のふくらはぎを何回か蹴った。

「いてついてっ! なんだよ俺なりの慰めだろ?」

「何よ……むかつく。」

井上とは中学のときからずっと一緒だ。

こいつはいつでももてるのに、私は振られてばかりの人生。最低
最悪…

「あゝあ…今回はかなり良い感じだったのに…なんでだろ。」

「うゝん…はは。」

「なんで笑うのよ!! ばか!! 嫌い!!」

高校に入ってから3回は振られた…

「もお！！次ぎ行かなきゃ！次！！」

「えっ！！？」

「……なんであんたがびっくりするの？」

井上は苦笑いしながら言った。

「そんなに振られてんのに懲りないなあ…と。」

「だって恋してないと生きていけない！！」

「バカだ…」

「何よ！！井上には関係ないじゃん！！！」

「まあな。」と井上は笑い4組の教室へ入った。私は隣のクラスに入る。

次の日

朝早く学校に着いた私は真那美がくるのを首を長くして待った。

「早く来ないかな…あ！！真那美！！」

「あ。美菜はおはよ」

「おはよ！真那美！！私恋した！！」

私は親友に今回もいち早く相談した。

「何？また？今度は誰。」

彼女もちょっと呆れた顔で聞いた。

「あのね、一個上の先輩！！格好いいんだよ」

「…ねえ美菜？本当に好きなの？その人のこと。」

突然の彼女の言葉に一瞬戸惑った。

「う…うん。な…なんで？」

すると彼女はすこしほほえんだ。

「ならいいんだけど。」

真那美の言葉が全く分からないわけではない…

体育の時間：

「あ。いいな男子。バスケやってる。」

真那美が隣のコートを見て羨ましそうに言った。

「本当だ。…」

私の視線は一際目立つ井上へいつていた。

「まだ：引きずってるんじゃないの？」

真那美は私の視線に気付いたらしい。

「べ：別に！！ひきずってないよ！過去のこと何て…」

2年前：

私と井上は中学3年だった。1年からクラスが一緒だったし好みもすごいあっていたから、私達はすごく仲良くていつの間にか私は井上が大好きになっていた。

「もうすぐ卒業だね…」

真那美が外を見ながら私に話しかけた。

私は中学生生活最後であろう日直の仕事で、日誌を書いていた。

「うん：さみしいね。」

ペンを止めて私は日誌を眺めた。

「井上に：告白しないの？」

「え！？」

2人しかいない教室で、わたしの声は木霊した。

「早く言わないと：誰かにとられるかもよ？井上もてるし。」

「……高校一緒だから安心してた…」

「絶対両思いだと思うんだけど…」

桜の花は、少し開きかけていた：

卒業式終了後、私は井上を呼び出した。

「……あのさ……卒業だね。」

「ああ……高校もお前と一緒にだけだな。」

「うん……私さ。」

「……。」

「井上のこと……好き……なんだ。」

「え……」

「第二ボタン……くれない？ 思い出に……」

「……ごめん……」

その後のことは覚えてない。

家に帰って真那美に電話して泣きながら結果を言ったのは覚えてる。

「まだ、井上のこと好きなんじゃないの？」

「……しつこいでしょ……そんなの。」

私はバレーボールについて、授業に参加した。

真那美の目を見られなかった……

その日の昼休み、真那美はどっか行って、しばらく帰ってこなかった。

ガラガラ……

「おかえりー……何したの？」

真那美は何か言いたそうな顔している。

「どう……したの？ なんか変だよ？」

「いや……。……うん……。」

「？」

すこしの間、真那美は何やら考え込んでいた。

「やっぱ言う……！！！！」

「は！？ なに？？」

真那美は私の肩を掴んだ。

「美菜？あんたが高校入って何度も振られたのは、井上のせいだよ？」

は？？？何いってんのこの子…

「さっき井上と話してたんだけど、美菜の今度の好きな奴教えてくれって…

何でか問いつめたら………」

遅いんだよ…ばか…

私は走っていた。井上のいる昇降口に向かって…

『何でか問いつめたら、美菜が告白して付き合うことになったら嫌だからって…

聞いてどうすんの？って聞くとあいつ、その人に美菜を振ってもらうよう

頼みに行くって……今までも他の人に聞いて何度も美菜の好きな人に頼み込んだ

みたい…美菜を振ってくれて……。意味分かんないよあいつ…
ばかじゃない？』

バカバカバカバカ

あんたが私をふったんじゃない…今更なんなの？

ああでも…涙が出そう……

「井上！！！！」

下駄箱の前にしゃがみ込んでた井上は私に気付いて目を見開いた。

「な…なんでここに？？」

「あんた…2年前に私のこと振ったくせに…邪魔しないでよ!」

「真那美のヤツ言ったのか…ごめん!」

井上は頭を深く下げた。

なんなの? 意味分かんない…

「でも…」

「?」

「俺お前のこと振ってないから…」

…何いってんの…??

「振ってない? 井上私にゴメンって…」

「あれは! 後輩に第二ボタン下さいって先に言われてたから、第二ボタンはあげれないって意味…その後お前勘違いしてたみたいで

なんか告白の返事できなかったし…あの後から結構たってのに好きだなんて

言えなかったんだよ…」

「な…何それ…で、でもだからって…私は振られるたんびに悲しかったんだよ…」

「ゴメン…」

「でも、本当は振られて良かったんだと思う…」

「え?」

「私だって…ずっと井上のこと、好きだったけど…」

しつこくして、嫌われるの…やだったから

忘れようって思って…無理矢理好きな人作って…でも、やっぱり井上が…」

「美菜……」

「何?」

「好きだ!! 俺と付き合ってくれ!!!」

学校中に響き渡る井上のでっかい声に、私は目が飛び出しそうだった。

でも、嬉しかった……すごく、遠回りしちゃったけど……

「はい……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5707b/>

遠回り

2011年4月10日17時09分発行